ShinDengen

第６４回 東日本実業団対抗駅伝競走大会

【出場結果】

実施日　：　１１月３日（金・祝）　８：００スタート

コース　：　埼玉県庁～深谷駅折り返し～熊谷スポーツ文化公園陸上競技場

総距離　：　７区間 ７６．９ｋｍ

成　績　：　3 時間 54 分 5 秒　19/36 位

出場者・リザルト　：

1 区	11．6 ㎞	加藤　　平	13/36 位	33‘58“
2 区	8．0 ㎞	小林　航央	24/36 位	24‘14“
3 区	16．5 ㎞	坪井　響己	19/36 位	50‘48“
4 区	9．5 ㎞	小野　修平	22/36 位	29‘38“
5 区	7．8 ㎞	田中　龍誠	16/36 位	24‘02”
6 区	10．6 ㎞	親﨑　達朗	15/36 位	31’44“
7 区	12．9 ㎞	関口　大樹	16/36 位	39‘41“

【レポート】

今年度の大会は、昨年の大会より更に出場チーム数が増えて全 36 チームが出走となり、埼玉県庁を出発して全 7 区間、全長 76.9ｋｍでレースが行われました。

当日のレースコンディションは、日中にかけ気温は 25℃まで上昇し、例年以上に暑さを感じる中でのレースとなりましたが、コンディションとして悪くはなく、ニューイヤー駅伝のプラチナチケット「12 枠」をかけた熱いレースが展開されました。

今年の大会の特徴としては、過日開催されたパリ五輪マラソン選考会の MGC（マラソングランドチャンピオンシップ）の出場資格を持つ選手が所属するチームは、この大会を完走することで、12 枠から外れてもニューイヤー駅伝の出場権が与えられる点が挙げられます。

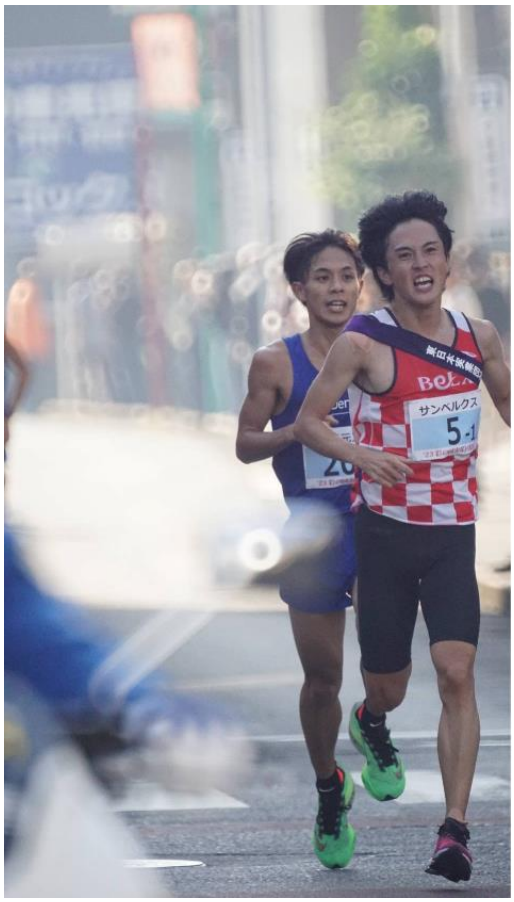
レースは、やはり出だしの 1 区から遅れをとっては勝負にならないため、各チームとも当然にチームのエース級選手を配置し、当社は今年も 1 区にはエースの加藤を起用しました。

スタートの号砲を待つ選手達

今年度の加藤は、8月には月間走行距離1000キロを超える勢いで走り込みを行っていましたが、8月の下旬に流行り病を患って体調を崩すと、なかなか体調が回復せず、苦しい時期を経たものの、10月に入るとコンディションも上向き、まずまずの状態でレースに臨みました。

レース展開は、近年では先頭集団が牽制し合い、スローペースに陥ることが多かったですが、今年は入りの5ｋmを14分40秒台で通過して更にペースは上がり続け、先頭集団から次々と選手が脱落する中、加藤は落ち着いて集団後方で粘り、10ｋmを29分10秒台で通過、以後は集団から離されるも第2集団でレースを進めて、先頭とは27秒差の13位で2区の小林に襷を繋ぎました。

万全とまでは言えないコンディションでも、確実に自分の役割を果たす加藤の集中力のお陰で、今年も駅伝の流れを掴んだ中で幸先の良いスタートを切ることが出来ました。



1区　加藤選手

2区は外国人選手を起用することの出来るインターナショナル区間となり、ペース配分が非常に難しい区間となります。

今年も2区には、外国人選手のペースにも惑わされず走ることのできる小林を起用しました。

今年度の小林は6月に行われた日本選手権の1500mで9位に入る活躍を見せた後、7月には第一子を授かって育児休暇を取得、家事と競技の両立をする献身的な姿勢で秋のシーズンを迎え、

ShinDengen

その後は９月に脚の痛みを訴えて継続した練習を行えず不安要素がありましたが、駅伝本番に向けて高い集中力でコンディションを整えてきました。

レースでは、序盤こそ外国人選手のハイペースに見劣りしない、ダイナミックな走りでレースを進めたものの、３ｋｍ過ぎ以降は身体が固まってペースダウンし、それでも強い気持ちで走り切り、順位は 21 位に落としましたが 3 区の坪井に襷を繋ぎました。

２区　小林選手

３区　坪井選手

3 区は 16.5ｋｍの最長区間となり、各チームともエース級の選手を起用してきますが、当社は今年も長い距離を得意とする坪井を起用しました。

坪井は、昨年のレースで力を発揮出来ず悔しい思いをしており、この一年間、練習でも駅伝の単独走を意識して取り組み、7月には士別ハーフマラソンで入賞、10 月のレガシーハーフマラソンでもコンディションの悪い中で 1 時間 3 分台をマークして着実に力を蓄えてきました。

レースでは 10 秒前にいるチームを追っての展開となり、1ｋｍ3 分を少し切るタイムで走り出すと、一時は前方のチームと少しずつ距離を詰める展開の中、後半は強い日差しと暑さの影響を受けてペースが鈍りだしましたが、ラストスパートで何とか前方チームとの差を 3 秒まで詰め、順位は変わらず 21 位のまま 4 区の小野に襷を渡しました。

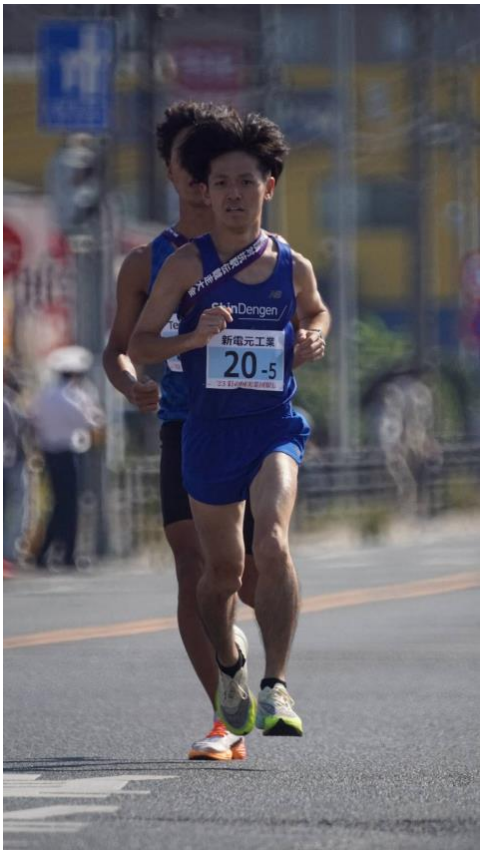
４区は 9.5ｋｍの距離ですが、若干上り基調のコースとなっており、中盤以降の駅伝の流れを作る重要な区間となります。今年は、この区間に調子を上げてきた新人の小野を起用しました。

今年度からチームに加入した小野は、春先に貧血や体調不良のアクシデントがあり、シーズン前半はレースに出場する機会を得られず、その後、食生活等の生活改善を行いコンディションを整え直すと、秋口からはようやく本来の走りのリズムに戻り、今回の駅伝にも自信を持って起用することが出来ました。

レースでは、前方の選手が見える位置での走りだしとなりましたが、前方の選手が思った以上にハイペースを刻み、序盤こそ姿が見える位置でレースを進めたものの、中盤以降は引き離され、更には、後方から追い上げてきた選手にも抜かれ、順位を 1 つ下げて 22 位で 5 区の田中に襷を渡しました。

駅伝に向けて調子を上げていた小野にとっては悔しい結果となりましたが、今後の成長の糧にして欲しいと思います。

４区　小野選手



５区　田中選手

５区は、この駅伝では最短区間で 7.8ｋｍの距離となり、この区間には本番に勝負力を発揮する田中を起用しました。

田中は、8 月に初マラソンとなる北海道マラソンを走り、その後は業務等の兼ね合いもあって、10 月に入っても調子が上がらず厳しい状況でしたが、直前の駅伝 2 週間前から練習に集中して

取り組むことが出来、何とか駅伝本番に調子を間に合わせることが出来ました。

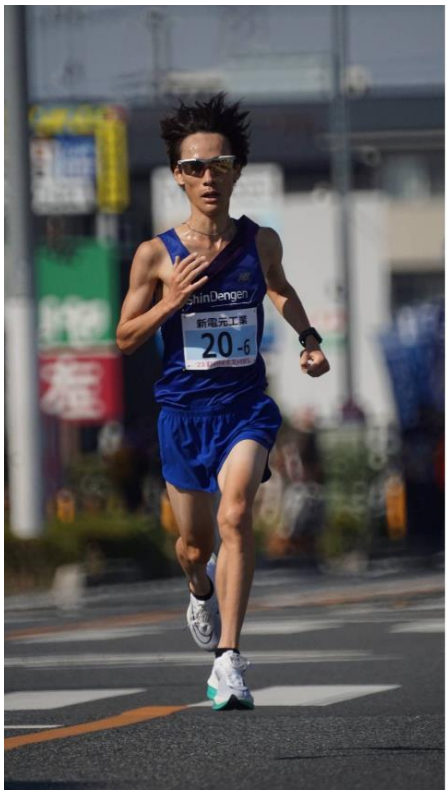
レースでは、序盤からしっかりと１ｋｍ3 分のラップを刻み、３ｋｍ過ぎに前方の選手を抜き去ると、軽快な走りは衰えず、更に 1 チームを抜く好走を見せ、20 位で 6 区の親﨑に襷を渡しました。

大学時代に箱根駅伝の山登りを 2 年連続で経験した勝負強さを、ここにきて今回の駅伝でも発揮してくれました。

続く 6 区は 10.6ｋｍの距離となりますが、ここには当社でも力のある親﨑を起用しました。今年度の親﨑は体調不良等があり、継続してコンディションを整えることが出来ず、精神的にも苦しいシーズンを送りましたが、9 月に 5000m のトラックレースで 14 分 20 秒台をマークすると、少しずつ調子を上げてきて、駅伝前のポイント練習でも良い走りが出来ていたため、期待を込めて 6 区に起用することを決めました。

レースでは、スタートしてすぐに前方にいた選手を抜き去ると、1ｋｍ3 分を切るペースで淡々とラップを刻んで後続との差を広げる快走を見せ、最後までペースを落とすことなく走り切りました。

ここで先頭と 10 分以上の差が開き、無念の繰り上げとなりましたが、順位は 19 位となり 18 位を走る警視庁チームとは 20 秒まで差が詰まりました。



6 区　親﨑選手

7 区　関口選手

ShinDengen

7 区のアンカーは 12.9ｋｍと全区間で 3 番目の長距離区間で、最後のポイントとなる区間となるため、ロードの走りに安定感のある関口を起用しました。

今年の関口はトラックレースでは精彩を欠いていたものの、10 月に実施した 10ｋｍの単独走では良いタイムで走れており、その走りに期待を込めてアンカーに起用しました。

レースでは、序盤から警視庁チームの選手との競り合いとなり、ここで 20 秒以上の差で競り勝つと 18 位の順位が見えてきましたが、10ｋｍ過ぎから徐々に離されて、そのまま追いつくことは出来ず、総合 19 位の 3 時間 54 分 5 秒でゴールしました。

関口の走りとしては、トラックのタイムから考えると、タイム以上の走りをしてチームに貢献してくれました。

【総　括】

昨年度の大会では総合 20 位に終わり、雪辱を期して臨んだ駅伝でしたが、結果として順位を１つ上げる 19 位で大会を終えることが出来ました。

チーム目標に掲げた「タイム 3 時間 50 分切り、順位 15 位」からは、かけ離れた結果となりましたが、一方で駅伝の流れが途絶えても後半で巻き返す「全員駅伝」は出来ており、チームの成長を肌で感じることが出来ました。

各チームが強化を進める中で、フルタイム勤務で競技を行う私たちにとって東日本実業団駅伝で強化実業団チームに競り勝つことは並大抵のことではありませんが、決して不可能なことではありません。

ShinDengen

強化実業団チームに引けを取らない、それ以上に高い意識を持って、競技に向き合えている選手も今のチームには存在しており、チーム全体がそのように共通の意識で競技と向き合えれば、必ずやチーム目標をクリアするだけでなく、更に高みを目指せると確信しております。

来年度の大会に向け、あらためてチームとしての課題を洗い出し、課題克服を目指して日々の地道な競技活動に邁進して参ります。

また、今回の駅伝に際し、朝早くから沿道に駆けつけて頂き温かいご声援を頂いた多くの関係者の皆さま、テレビ放映で当社に多くのご声援頂いた皆さまにこの場を借りて御礼申し上げます。

引き続きまして、皆さまの温かいご声援の程、何卒宜しくお願い致します。

以　上

写真提供：新電元工業株式会社

佐藤圭一様、坂本千夏様